

# 小1の母は 時短勤務に逆戻り

## 整備途上の学童保育が働く母に抱かせる罪悪感

1歳に満たない子どもを保育園に預け始めたときは、胸が痛んだ。小1になって再び、同じ思いをすることになるとは。結局、罪悪感を抱いて解消に動くのは母たちで……。

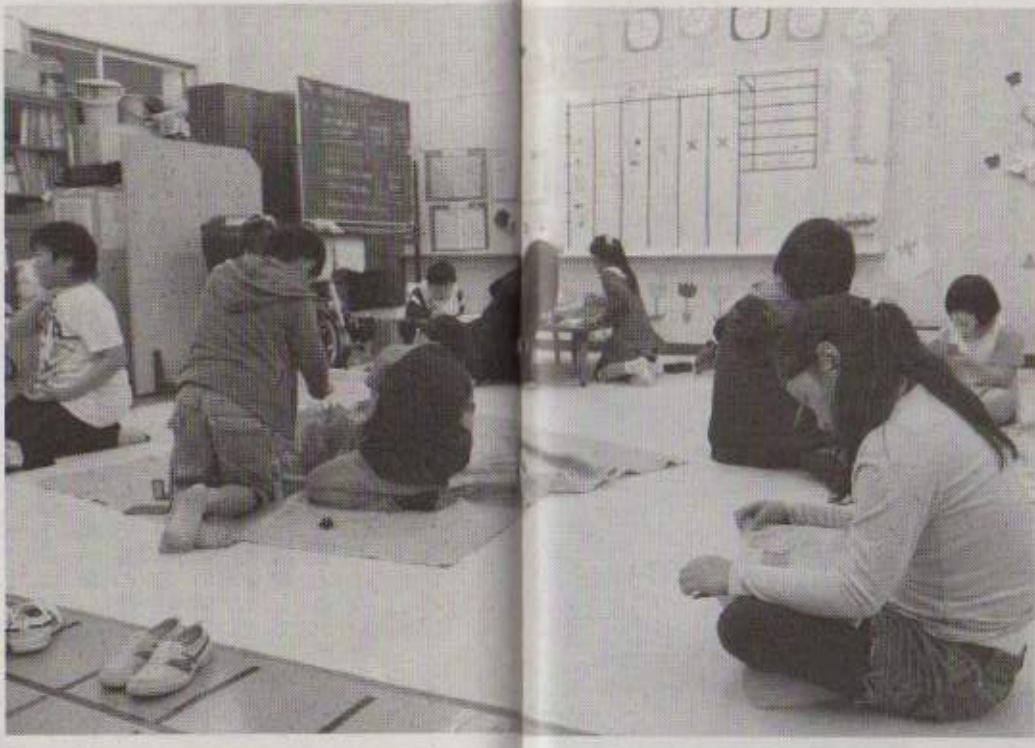
長男(6)は早生まれで、身長は110センチにも満たない。だが、背伸びをしてうんと手を伸ばしたら、ボタンに指先が届いた。大丈夫だ。

「じゃあ、そこにカードを当てて、口階を押しして」

2カ月前、会社員の女性(43)が長男(6)に練習させたのは、自宅マンションのエレベーターに乗る方法。小学校入学に

備え、一人で帰宅する特訓だ。保育園時代は午後7時半までの延長保育を利用してフルタイム勤務していたが、学童保育は午後6時まで。やむを得ず、4月からは時短勤務に切り替えた。

それでも長男は、午後5時に学童を出て一人で帰宅し、少しの間、留守番することになる。50代で専業主婦の姉は言った。「母親が、おかえりなさい」と



「友だちで遊ぶのが大好き。自由な時間があるのがいい。夕見アツ子」

迎えてあげるべきよ。手作りのおやつも用意してあげなさい。ちゃんと愛情をかけないと」

### ほかのママたちの目

子どもの小学校入学で、共働き家庭が直面する「小1の壁」。学童保育に入らず放課後の預け先がなかったり、あっても保育時間が短くて就労継続が困難になったり。しかもこの壁には、子どもたちの我慢と、それに伴う親の罪悪感という要素も塗りこまれている。

保育園ならどの子の母親も働いているが、小学校では違う。昭和。気質な姉の説教は無視できても、クラスのほかのママたちが自分たち親子をどう見ているのかは気になる。子どもに愛情がない親だと思われるだろう。今年には学校に慣れるのが目標」とゆったり構える

「武道教室もアートの、もう全部行かない。学校も行かない」突然、長男が言い出した。シヨックは隠して「今までいい子でよく頑張った」とほめ、女性上司と相談。仕事を続けつつ、有休や早退で自宅で長男と過ごす時間を確保した。様子を見ているうちに、2カ月前ほど長男のやる気は復活。それにしても半年以上、元気に通っていたのになぜ? たどりついた原因は「寒さ」と「暗さ」だった。

### 「聖心に学童」への反響

女性の場合、運よく乗り越えられたが、こうしたことがきっかけで仕事を諦めるケースは少なくない。そうでなければ逆に、「多少の無理があっても数年のことだから」と、子どもにも我慢を強いることになる。もちろん、そんな我慢を前提に働き続けたい母親はいない。

この春、そんな女性たちに勇気を与える出来事があった。聖心女子学院初等科の学童保育開設だ。運営を任された放課後NPOアフタースクールの平岩国泰代表理事は言う。

「母校の動きに勇気づけられた。女性として働くことへの希望が持てた」と、OGからも反響がありました」

同校が「社会に貢献する女性の育成」という理念に基づいて学童保育を開設したことは、いつかは結婚、出産を望む若い女性たちにとっての福音。平岩さんは言う。

「自宅のゲーム機をこっそり持ってきて使います」と言う。当然のことだが、学童には学校からまっすぐ行くので、ゲーム機を持って学校に行くことにならない。目にしたのは、テレビに張り付けて持参したゲームソフトで遊ぶ集団や、それぞれの携帯用ゲーム機で黙々と遊ぶ子どもたち。すぐに退会して、別の学童に移った。

「ゲーム自体が悪いとは思いません。指導員の数も多くないので仕方ない。でも、お金をかけてまで過ごさせたい環境ではなかった」(女性)

不動産関連会社で働く女性(36)は、

「冬が要注意です」と自らの経験話し始めた。トラブル発生は約半年前、長男が小3の12月だった。

女性か夫のどちらかが、保育

## 学童をめぐる 罪悪感を抱いたり 乗り越えたり

初めての夏休み。校庭が工事で使用できず、ずっと室内で過ごすことになってショック……。夫婦の実家に1週間ずつ、さらに1週間は休暇を取って旅行に行きました

学童があるのは校舎の奥の離れ。息子は、暗くて怖いと行かなくなった。結局、刑事ドラマの再放送が子守代わり

毎日、英語などの習い事に通わせました。親の送迎が無理な3日間、ファミリーサポートに依頼。小2の現在もそれを継続中

特別なプログラムなど必要ない。放課後はゆったりごろごろできるのがいいと聞きま

保育園時代から絵本などを一緒に読んで、活字は苦にならない。家では漫画を禁止しているが、学童ではいい漫画を読むように言っている



「もともと遊ぶ場所がなかった。保育園時代は、お母さんと一緒に遊ぶのが楽しかった。今は、友達と遊ぶのが楽しい」

「卒園、入学に迫られてバタバタしているうちに、6月の決算期に突入。9月まではお盆も何も関係ない状態でした。定時には帰っていましたが目が回るほど忙しくて、夏休み対策が甘かった……」

女性は保育園の感覚で毎日、長女を学童クラブに通わせたが、人数が極端に少ない日が多くあった。多くの共働き家庭が、子どもを祖父祖母のいる田舎に行かせたり、民間のキャンプに参加させたりしてメリハリをつけ、「ずっと学童」にならないようにしていたことは後で知った。

「毎日、淡々と通っていたのはうちの子だけでした」

ママ友でも残業が多かったり管理職だったりする人たちは、「小1の壁」を見越して民間の学童保育が充実した私鉄沿線などに住んでいた。彼女たちの通う学童では、長期休暇中は遠足

### 週に1度のゲームの日

しかし、民間の学童を選んでこんなことがある。

アパレル会社に勤務する女性(44)が次男を通わせた民間学童には、「週に1度のゲームの日」があった。事前説明会で指導員

「自己肯定感の低い日本の子どもたちが、格差なくのびのびと豊かな体験ができる放課後の時間をつくりたい」

質の確保を考えると、ボランティア頼みには限界がある。公的支援は不十分で、人件費など活動資金の確保が大きな課題だ。

ライター 三宮千賀子